

間接疑問縮約の派生について： LF コピー分析対 PF 削除分析

竹 腰 敦

1. 序

本論は間接疑問縮約 (sluicing) と呼ばれる省略現象を通して、省略現象の派生のメカニズムを明らかにしようという試みである。間接疑問縮約とは、(1) のような省略構文のことである。

- (1) a. Somebody just left - guess who.
b. He is writing something, but you can't imagine what.

(Ross 1969 : 252)

この構文では、完全な疑問文を復元できる環境で wh 句だけを残し、疑問文の他の要素が省略されている。例えば、(1)は(2)と同一の意味を持っている。

- (2) a. Somebody just left - guess [_{CP} who [_{IP} t just left]].
b. He is writing something, but you can't imagine [_{CP} what [_{IP} he is writing t]].

したがって、(1)では(2)の間接疑問文内の IP が省略されているといえる。

省略構文の派生の分析としては、LF コピー分析と PF 削除分析の2つがある。LF コピー分析によると、省略される要素は空範疇として統語構造に導入され、LF において空範疇の先行詞が空範疇にコピーされてその意味内容が復元される。LF コピー分析のもとでは、(1)の統語部門での表示は(3)となる。(3)における e は空範疇を示している。

- (3) a. Somebody just left - guess who [_{IP} e].

- b. He is writing something, but you can't imagine [_{CP} what [_{IP} e]].

一方、PF 削除分析によると、省略される要素も省略されない要素と同様に統語構造に導入され、ある条件の下で PF で削除される。PF 削除分析のもとでは、(1)の統語部門での表示はおよそ(2)のようになる。つまり、PF 削除分析では、省略が起こる場合も起こらない場合も統語部門での表示には基本的には違いがないのである。

本論では、間接疑問縮約に対する LF コピー分析はいくつかの問題があることから支持できないものであり、PF 削除分析が妥当な分析法であることを主張する。論文の構成は次のとおりである。まず 2 節において間接疑問縮約の 3 つのグループを提示する。3 節では LF コピー分析の問題点を指摘する。4 節では PF 削除分析がそれらの問題点を解決することを示す。5 節は結語である。

2. 間接疑問縮約の基本的事例

Ross (1969)、Levin (1982)、Chung, Ladusaw, and McCloskey (1994) 等、多くの文献では、間接疑問縮約は 3 つのグループに分けられている。

第一のグループは、残置される wh 句が付加詞であり、省略された IP の先行詞の中に wh 句に対応する要素が含まれないものである。(4)では、省略された IP の先行詞と思われる IP は、wh 句に対応する付加詞を含んでいない。

- (4) a. He's writing, but you can't imagine where/why/how/how fast/
with whom.
b. This opera was written in 19th century, but we're not sure by
whom.
c. If Sam was going, Sally would know where.

(Chung, Ladusaw, and McCloskey 1994 : 4)

第二のグループは、残置される wh 句が項であり、省略された IP の先行詞の中に wh 句に対応する要素が含まれないものである。

- (5) a. She is reading. I can't imagine what.

- b. He shouted again, but I don't know to whom/who to.
- c. They're going to serve the guest, but it's unclear what. (ibid.)

第三のグループでは、先行詞となる IP の中に残置される wh 句に対応する句が存在する。この句は通常 something などの不定代名詞である。

- (6) a. He's going to give us one old problem for the test, but which problem isn't clear.
- b. She's reading something,. I can't imagine what.
- c. If Sam was going somewhere, Sally would know where.

(ibid.)

間接疑問縮約の分析では、これら 3 つのグループが適切に説明できなければならぬ。

3. LF コピー分析

間接疑問縮約の LF コピー分析には、Chung、Ladusaw、and McCloskey (1994)、Lobeck (1995) 等がある。LF コピー分析では、省略箇所は空範疇として統語構造に導入され、LF においてその先行詞がコピーされることによってその意味を復元する。したがって、(7 a) の統語部門での表示は (7 b) である。

- (7) a. Somebody just left - guess who.
- b. Somebody just left - guess [_{CP} who [_{IP} e]].

LF において先行詞が空範疇にコピーされて (8) が派生される。

- (8) Somebody just left - guess [_{CP} who [_{IP} somebody just left]].

(8) が不適切な LF 表示であることは後述するが、LF コピー分析のもとでは、以上のように間接疑問縮約の派生が進むと考えられている。

ではここで、2 節で見た間接疑問縮約の各グループを LF コピー分析がどのように説明するかを概観し、その問題点を指摘する。まず、第一のグループの (4 a) を見てみよう。(4 a) を (9) として示す。

- (9) He's writing, but you can't imagine where.

(9) の統語部門での表示は (10 a) であり、LF で空範疇に先行詞がコピーされて

(10 b)となる。

- (10) a. He's writing, but you can't imagine [_{CP} where [_{IP} e]].
 b. He's writing, but you can't imagine [_{CP} where [_{IP} he's writing]].

(10 b)は適切な LF 表示とはいえない。なぜならば、復元された IP 内に where が束縛する変項が存在しないからである。したがって、(10 b)は、空虚な量化の例として排除されるはずである。この問題を解決するために、Chung, Ladusaw, and McCloskey (1994) は、芽吹き (sprouting) という LF 操作を提案している。芽吹きとは、X^{bar}理論に従い、LF で適切に認可される限りにおいて LF において自由に構造を作り上げる操作である。芽吹きという操作を仮定すると(10 a)の空範疇が LF で復元される際に where に束縛される変項として働く付加詞を新たに導入することが可能になり、(11)のような LF 表示が得られる。

- (11) He's writing, but you can't imagine [_{CP} where_i [_{IP} he's writing t_i]].

(11)では、where は t を束縛しており、適切な演算子-変項関係が成り立っている。

しかしながら、この芽吹きという操作は Chomsky (1995) の枠組み (または GB 理論の枠組み) においては問題となる。Chomsky (1995) の枠組みにおいては LF における語彙挿入は基本的には禁じられている。唯一許される LF での語彙挿入は、音声素性を持たない要素のルート節点への挿入である。(p. 292) (11)での変項は音声素性は持っていないものの、その挿入はルート節点に対して行われてはいないため許されないことになる。また、GB 理論の枠組みでは、LF での語彙挿入は投射原理に違反してしまう。

続いて、2節で見た第二のグループを考察してみよう。Chung, Ladusaw, and McCloskey (1994) はこのグループも芽吹きという操作を用いて説明している。しかし、芽吹きという操作は第一のグループのところで見た問題を生じさせてしまう。(5 a)を(12 a)として繰り返す。(12 a)の統語部門での表示は(12 b)である。

- (12) a. She's reading. I can't imagine what.

b. She's reading. I can't imagine [_{CP} what [_{IP} e]].

LF で空範疇に先行詞がコピーされ、さらに芽吹きが適用されると(13)の LF 表示が得られる。しかし、第一のグループのところで述べたようにこの変項の LF での挿入は Chomsky (1995) の枠組みでは許されない。¹

(13) She's reading. I can't imagine[_{CP} what_i [_{IP} she's reading t_i]].

続いて、2 節で見た間接疑問縮約の第三のグループを考察してみよう。(6 b) を(14)として繰り返す。

(14) She's reading something, I can't imagine what.

LF コピー分析によると、(14)の統語部門での表示は(15 a)であり、LF でコピーが行われて(15 b)が得られる。

(15) a. She's reading something,. I can't imagine [_{CP} what [_{IP} e]].

b. She's reading something, I can't imagine [_{CP} what [_{IP} she's reading something]].

(15 b)は、適切な LF 表示として容認されるであろうか。具体的に言うと、what と something の間に演算子-変項関係が成り立つであろうか。Chung, Ladusaw, and McCloskey (1994) は、Heim (1982) の不定名詞の理論を採用し、不定名詞は談話レベルで指示物を与えられたり、また、他の演算子に束縛されることが可能である自由変項であると主張している。すると、(15 b)の someone は wh 句によって束縛されることが可能になる。しかし、ここで成り立つ束縛関係は意味論上のものであり、統語的な束縛関係に应用できるかどうかは非常に疑わしい。もし応用できるとすると、(16)においても something が統語的な変項として機能しうることになり、(16)は事実にして文法的であると予測されてしまう。

(16) *What is she reading something ?

したがって、(15 b)において something が変項として機能しうるとしても、それは意味的な変項であり、統語的な変項としては機能し得ないことになる。

同様の問題が(17)のように先行詞が定名詞句を含む文の場合にも生じる。

(17) a. Joan said she talked to the students. Fred couldn't figure out which students.

- b. He announced he had eaten the asparagus. We didn't know which asparagus.

(Chung, Ladusaw, and McCloskey 1994 : 31)

Chung, Ladusaw, and McCloskey (1994) は定名詞句も不定名詞句と同様に変項として働きうる可能性を指摘しているが、その可能性を認めるとしても (15) の場合と同様にここでも統語的な束縛関係が成り立たない。

さらに、(18) は深刻な問題となる。(18 a) の LF 表示は (19) となるが、which chapter に War and Peace を束縛させることは不可能である。

- (18) a. John is working on War and Peace but I don't know which chapter.

- b. She talked to John or Mary but I don't know which (one).

(ibid. : 33)

- (19) John is working on War and Peace₁ but I don't know which chapter₂ John is working on War and Peace₁.

Chung, Ladusaw, and McCloskey (1994) は (18 a) の wh 句は実は (20) であるとしているが、(20) を採用しても which chapter of War and Peace は War and Peace を束縛することはできない。なぜならば、which chapter of War and Peace 全体が持つ指標は War and Peace が持つ指標とは異なるからである。また、いかにして (20) の War and Peace が削除されるのかが明らかではない。よって (18 a) が (20) から派生されるという仮定は認めがたい。

- (20) ... but I don't know which chapter (of) War and Peace.

(19) の構造が正しいとすると、残置される wh 句 which chapter に対応する句が省略される IP の先行詞の中に含まれていないことになるので、(18) は間接疑問縮約の第三のグループではなく、第二のグループに分類されるべきものであろう。4 節では (18) が PF 削除分析のもとで第二のグループとして適切に説明されることを示す。

本節では、LF コピー分析のいくつかの問題点を指摘した。4 節では PF 削除分析によってこれらの問題は解決されることを見る。

4. PF 削除分析

3 節で見たように間接疑問縮約の LF コピー分析にはいくつかの問題がある。本節では PF 削除分析がこれらの問題を解決してくれることを指摘する。PF 削除分析は間接疑問縮約に対してのみ有効な分析方法ではなく、すべての省略現象に対して有効な分析法であるはずである。そこで、間接疑問縮約の具体的説明を行う前に PF 削除分析によると省略構文がどのように派生されるかを VP 削除構文を例に簡単に示しておく。

4.1 省略構文派生のメカニズム

本論の PF 削除分析は、基本的には Chomsky (1995 : 252) で提案されているものである。ただし、Chomsky の提案は非常に概略的なものであり、不明確な点が多いので、そうした点を明確にしていく。(21)の派生を考察してみよう。

(21) John loves Mary, and Bill does, too.

PF 削除分析のもとでは(21)の統語部門での表示は(22)である。

(22) John [_{I-S}] [_{VP} love Mary], and Bill [_I do-es] [_{VP} love Mary], too.²
 統語部門において任意の要素に対して随意的に「平行性解釈に従う (subject to parallelism interpretation)」という標示がなされる。第二の等位節の love Mary が「平行性解釈に従う」と標示されたとしよう。標示された部分を斜体で表すと(23)となる。

(23) John -s love Mary, and Bill do-es *love Mary*, too.

(23)は PF へ spell out され、斜体の要素にコピーイントネーションとよばれる特殊なイントネーションが与えられる。これは移動のコピーに与えられるものと同じイントネーションである。コピーイントネーションを与えられた要素を斜体で表すと、(23)の PF 表示は(24)となる。

(24) {John -s love Mary, and Bill do-es *love Mary*, too}

(24)の PF 表示において、-s+love と do-es はそれぞれ融合し、loves、does となる。さらに、コピーイントネーションを与えられた要素が義務的に削除されて(21)が派生される。

統語部門における「平行性解釈に従う」という標示は随意的に行われるので、もしその標示が行われなければ省略のない(25)が派生される。³

(25) John loves Mary, and Bill loves Mary, too.

「平行性解釈に従う」と標示された要素は LF において認可されなければならない。本論では、Chomsky (1995) に従い、「平行性解釈に従う」と標示された要素は LF において連鎖の末尾要素として認可されると仮定する。つまり、「平行性解釈に従う」と標示された要素は独自のニューメレーション標示を奪われ何らかの要素に依存しなければならないと仮定する。これは移動の痕跡と同じ特徴である。(24)の場合、(26)のような(21)の第一の等位節中の要素を先頭要素とする連鎖が形成されることによって、「平行性解釈に従う」と標示された要素は認可される。ただし、今のところこの連鎖の構成員がどのような局所的関係になればならないかは明らかではない。

(26) ([love Mary], [love Mary])

(22)において「平行性解釈に従う」と標示されることが認可されるのは love Mary だけであるので、これ以外の要素 (例えば、Bill) が標示され、PF で削除されることはない。⁴

4.2 間接疑問縮約

4.1 で概観した PF 削除分析に従って 2 節で見た間接疑問縮約の 3 つのグループを分析してみよう。

4.2.1 グループ 1

このグループでは、残置される wh 句は付加詞であり、削除される IP の先行詞にはそれに対応する句が含まれていない。(27)を見てみよう。

(27) He's writing, but you can't imagine where.

(27)の統語部門での表示は(28)である。(28)の t は移動の痕跡 (コピー) である。⁵

(28) He's writing, but you can't imagine [_{CP} where_i [_{IP} he's writing t_i]].

(29)の斜体の he's writing が「平行性解釈に従う」と標示される。

(29) He's writing, but you can't imagine [_{CP} where_i [_{IP} *he's writing* t_i]].

PF において、斜体の要素にコピーイントネーションが与えられ、それが義務的に削除されることによって(27)が派生される。(29)の「平行性解釈に従う」と標示された要素は、LF において(30)のような連鎖が形成されることによって認可される。

(30) ([he's writing], [he's writing])

また、(29)において wh 句とその痕跡の間の演算子—変項関係も適切に成り立っている。したがって、LF コピー分析で必要とされた芽吹きという操作は必要なく、その操作によって生じた問題も生じないことになる。⁶

(27)の派生に関して注意すべき点は、(29)において wh 句の痕跡は「平行性解釈に従う」と標示されていないという点である。もし、痕跡まで標示されてしまうと、標示された要素は LF で認可されない。仮に(31)のような連鎖が形成されたとしても連鎖の構成員は完全に同一の要素でなければならないため、(31)は適切な連鎖として認可されない。

(31) ([he's writing], [he's writing t])

4.2.2 グループ 2

このグループでは、残置される wh 句は動詞の項であるが、省略される IP の先行詞の中には、その wh 句に対応する項が存在していない。このグループの場合にも、グループ 1 と同様の説明が可能である。

(32) She's reading. I can't imagine what.

(32)の統語部門での表示は(33)である。(33)では、斜体の要素が「平行性解釈に従う」と標示されている。ここでも wh 句の痕跡は「平行性解釈に従う」とは標示されていない。

(33) She's reading. I can't imagine_{[CP} what_t [_{IP} she's reading t₁]].

PF において(33)の斜体の要素が削除されることによって(32)が派生される。PF 削除分析のもとでは、t は wh 句の痕跡であり、演算子—変項関係が成り立っている。

さらに、ここでの分析は、(18)の説明も容易である。(18)は Chung, Ladusaw, and McCloskey (1994) はグループ 3 に分類したものであるが、残置される wh 句 which chapter に対応する句が省略される IP の先行詞内に存在しないこと

からグループ2として分析すべきものである。(18)の統語部門での表示は(34)である。注目すべき点はwh句の痕跡が「平行性解釈に従う」と標示されていない点である。斜体の要素がPFで削除されて(18)が派生される。

(18) John is working on War and Peace but I don't know which chapter.

(34) John is working on War and Peace₁ but I don't know [_{CP} which chapter₂ [_{IP} John is working on t₂]].

もし(34)で痕跡まで「平行性解釈に従う」と標示されてしまうと、(35)のような連鎖しか形成することができないので認可されないのである。(35)ではWar and Peaceとtの指標が異なるので、連鎖の構成要素が完全に同一であるとはいえず、(35)は適切な連鎖とはいえない。

(35) ([John is working on War and Peace₁], [John is working on t₂])

4.2.3 グループ3

このグループでは、残置するwh句に対応する不定代名詞が先行詞の中に存在する。

(36) She's reading something, I can't imagine what.

(36)の統語部門での表示は(37)である。

(37) She's reading something₁, I can't imagine [_{CP} what₁ [_{CP} she's reading t₁]].

ここで注意すべき点は、(37)では、グループ1、2と異なり、wh句の痕跡も「平行性解釈に従う」と標示されていることである。(37)の標示はLFにおいて(38)の連鎖が形成されることによって認可される。

(38) ([she's reading something₁], [she's reading t₁])

(38)では、動詞の目的語がそれぞれsomethingとtであり異なっているが、この違いは容認される。なぜならば、2つの句が持つ指標の値が同じであるからである。指標が同じであれば同一の要素であると認めなければならないということは、Fiengo and May (1994: 218)のvehicle changeの効果を説明するために必要と思われる。実際、指標の値が同じであれば連鎖形成の妨げにならないことは次のVP削除の例が示している。

(39) a. Dulles suspected Philby, who Angleton did, too.

(Fiengo and May 1994 : 219)

- b. Dulles suspected Philby₁, who₁ Angleton did [_{VP} suspect t₁],
too.

同様にして先行詞に定名詞句を含む(17)も説明される。(17 a)を(40)として繰り返す。

- (40) Joan said she talked to the students. Fred couldn't figure out which students.

(40)の統語部門での表示は、(41)である。斜体の要素が「平行性解釈に従う」と標示されている。痕跡もその中に含まれている。

- (41) Joan said she talked to the students₁. Fred couldn't figure out [_{CP} which₁ students [_{IP} she talked to t₁]].

PFにおいて(41)の斜体部分が削除されて(40)が派生される。

一見問題に見える例は、(42)である。(42)では(40)と同様に先行詞が定名詞句を含んでいるが(40)と異なり容認性が低くなっている。

- (42) a. ? *I know that Meg's attracted to Harry, but they don't know who.
b. ? *Since Jill said Joe had invited Sue, we didn't have to ask who. (Chung, Ladusaw, and McCloskey (1994 : 16))

(40)と(42)の違いは、これらに含まれるwh句の性質の違いから導き出される。(42)が容認されないことは、疑問のwh句は通常談話における旧情報を表すことはできないという疑問のwh句の談話上の特性によって説明が可能である。(42)の統語構造である(43)において「平行性解釈に従う」と標示された要素は連鎖(44)が形成されることによって認可される。(44)が意味することは、連鎖の性質上 t₁ は Harry₁ に依存しているということである。すると、t₁ あるいは who₁ は指示に関しても Harry₁ に依存することになる。よって who が旧情報を表していることとなるため、(42)は容認されないのである。

- (43) I know that Meg's attracted to Harry₁, but they don't know [_{CP} who₁ [_{IP} Meg's attracted to t₁]].

- (44) ([Meg's attracted to Harry₁], [Meg's attracted to t₁])

これに対して、もし(45)のように間接疑問縮約が起こらなかった場合、(44)のような依存関係は生じない。したがって、(45)は容認される。

- (45) a. I know that Meg's attracted to Harry, but they don't know who Meg's attracted to.
 b. Since Jill said Joe had invited Sue, we didn't have to ask who Joe had invited.

(Chung, Ladusaw, and McCloskey (1994 : 17))

ここで注意すべきことは、(45)の統語表示(46)において Harry と t は同一指標を振られていながらも指示的依存関係にはないということである。つまり、Harry も t も他の言語表現に依存することなく独自の指示内容を持っている。

- (46) I know that Meg's attracted to Harry₁, but they don't know who₁ Meg's attracted to t₁.

(46)の Harry と t の間に依存関係がないことを明らかにするため、指標の理論をもう少し厳密にする必要があるだろう。本論では、Fiengo and May (1994)の指標理論を採用することにする。Fiengo and May (1994)では、束縛理論に關係する指標の値 (indexical value) (下付き数字で表される) と依存理論に關係する指標タイプ (indexical type) (上付き文字で表される) の2種類の指標を仮定している。指標タイプには、指標をふられた要素がその指示内容に関して他の言語表現から独立していることを示す α 生起 (α occurrence) と他の言語表現に依存していることを示す β 生起 (β occurrence) がある。この仮定に基づくと(46)は(47)のように書き換えられる。変項が α 生起を持つことについては、Fiengo and May (1994 : 70) を参照してほしい。

- (47) I know that Meg's attracted to Harry₁ ^{α} , but they don't know who₁ Meg's attracted to t₁ ^{α} .

(47)では、Harry と t の指標のタイプはどちらも α 生起である。つまり、Harry と t はそれぞれ独自の指示内容を持ち、それらの間に依存関係はないのである。⁷

一方、(42)と一見同様の構造、指標関係を持っているように見える(40)は容認される。(40)の wh 句は(42)の wh 句と違って Pesetsky (1987) の主張する

D連結された wh 句 (D (is)source)-linked wh-phrase) である。D 連結された wh 句は話し手がすでに特定の人や物の集合を先行文脈から頭に描いており、その前提に立って発する表現である。したがって、D 連結された wh 句は先行詞と依存関係に入っても何の問題もないのである。

4.2.4 グループ 1・2 対グループ 3

4.2.1 から 4.2.3 節の主張によると、グループ 1・2 とグループ 3 ではその派生に違いがある。グループ 1・2 では、wh 句の痕跡は「平行性解釈に従う」と標示されることはないのに対し、グループ 3 では、wh 句の痕跡も標示されている。

(48) He's writing, but you can't imagine [_{CP} where_i [_{IP} he's writing t_i]].
(グループ 1)

(49) She's reading. I can't imagine [_{CP} what_i [_{IP} she's reading t_i]].
(グループ 2)

(50) She's reading something_i, I can't imagine [_{CP} what_i [_{CP} she's reading t_i]].
(グループ 3)

この相違はグループ 1・2 とグループ 3 の統語的振る舞いの違いを引き起こしている。

第一に、グループ 1・2 は島の効果を示す。⁸

(51) a. *Sandy was trying to work out which students would speak,
but she refused to say to whom.
(Chung, Ladusaw, and McCloskey 1994 : 45)

(51) の統語部門での表示は (52) であり、wh 句が wh 島から抜き出されている。

(52) *Sandy was trying to work out which students would speak, but she refused to say to whom_i she was trying to work out which students would speak t_i.
(ibid. : 45)

第二に、グループ 1・2 は付加詞位置からの抜き出しに関する ECP の効果を示す。

(53) *Sandy is very anxious to see which students will be able to solve the homework problem, but she won't say how. (ibid. : 45)

一方、グループ3はこれらの効果を示さない。第一に(54 a)のように島の効果を示さない。省略のない(54 b)が島の効果を示すのと対照的である。

- (54) a. Sandy was trying to work out which students would be able to solve a certain problem, but she wouldn't tell us which one.
 b. *? Sandy was trying to work out which students would be able to solve a certain problem, but she wouldn't tell us which one she was trying to work out which students would be able to solve. (ibid. : 37)

第二に、ECPの効果も示さない。省略がない対応形でその効果があるのと対照的である。

- (55) a. Sandy is very anxious to see if the students will be able to solve the homework problem in a particular way, but she won't tell us in which way.
 b. *In which way is Sandy very anxious to see if the students will be able to solve the homework problem *t*? (ibid. : 39)

Chung, Ladusaw, and McCloskey (1994) は、この振る舞いの違いを芽吹きという操作が適用されるか否かによって説明している。グループ1・2では芽吹きが適用され、芽吹かされた要素とwh句が連鎖を形成することになるので連鎖に課せられる制約(下接、ECP)が適用されることになる。一方、グループ3では連鎖は形成されず、連鎖に課せられる制約も適用されない。しかし、彼らはなぜグループ3では連鎖形成が行われないのかを明らかにしていない。

これに対して、本論で提案したPF削除分析によると、グループ3が島の効果やECPの効果を示さないのは、wh句の痕跡が「平行性解釈に従う」標示されているからである。この標示をされた要素は、先行詞との連鎖を形成することによって認可される。連鎖はその各構成員がまとまって単一の構成物であり、連鎖の末尾要素は独自のニューメレーション標示を持たない。したがって、連鎖の構成員のそれぞれにおいて統語的計算を行う必要はないのである。つまり、「平行性解釈に従う」と標示された要素は、統語的に不活性になるといえる。

これに対して、グループ1・2では、wh句の痕跡は「平行性解釈に従う」と

は標示されていない。したがって、この痕跡は統語的に不活性ではなく、さまざまな文法的な制約を受けなければならないのである。痕跡以外の IP 内の要素は「平行性解釈に従う」と標示されているが、これらの要素は LF で不活性であるだけで削除されてしまうわけではないので統語的計算に用いることは可能である。

4 節をまとめると、間接疑問縮約の 3 つのグループは PF 削除分析によって適切に説明することができる。3 つのグループは派生の仕方の違いによって 2 つに分けられる。その一つは、wh 句に対応する句が先行詞中にないため wh 句の痕跡を「平行性解釈に従う」と標示できないものであり、この痕跡は、統語的制約に従わなければならない。もう一つは、wh 句に対応する句が先行詞中にあるため wh 句の痕跡も「平行性解釈に従う」と標示されるものであり、この痕跡は LF では統語的に不活性であり、統語的制約には従わない。

5. 結語

本稿では、間接疑問縮約は、PF 削除分析によって説明されるべきであることを提案した。省略構文 (VP 削除、N' 削除、空所化等) はすべて同じメカニズムによって派生されると考えられるので、すべての省略構文は PF 削除分析によって説明されることになるだろう。

注

- ¹ LF コピー分析では、(12 b) の統語部門での表示から明らかなように、wh 句は、CP-Spec に移動するのではなく、そこに基底生成されている。したがって、(13) の t は、移動の痕跡ではなく、what とは完全に独立した語彙項目である。おそらくは、t は空の代名詞であろう。すると、(13) は空の再述代名詞を含む構造であるといえる。再述代名詞は通常島の内部に現れるとされているが、(13) の what と t の間には島は存在しない。また、この空の代名詞は島の内部に生起しても島からの抜き出しによって生じる容認性の低下を抑えることができない。

(i) *Agnes wondered how John could eat but it's not clear what.

(Chung, Ladusaw, and McCloskey 1994 : 45)

Chung, Ladusaw, and McCloskey (1994) は (i) の非文法性を彼らの分析からの説明を試みているが、その問題点は 4.2.4 で指摘する。

- ² 本論では、Lasnik (1994) に従って、接辞-s、-es は動詞と分離されて Infl を占めていると仮定している。Lasnik によれば、have、be 以外の動詞は顕在的統語論では繰り上がらない。PF において接辞と動詞が融合することによって loves、does が生み出される。接辞は動詞と融合することによって PF で認可される。したがって、(22) は PF で動詞が削除されてしまうので、do 挿入が行われずと接辞がいかなる要素とも融合できない。よって do 挿入が強制される。
- ³ (21) と異なり (25) では do 挿入が行われていない。(25) では動詞が削除されないの、動詞が接辞と融合することが可能であり、do 挿入の必要はない。
- ⁴ 「平行性解釈に従う」という標示は任意の要素に対して行われるので、(23) において Mary だけが標示されることも可能であり、その場合、その標示は LF でも認可されるはずである。Mary だけの標示が認可されないのは、「平行性解釈に従う」という標示が許されるのは英語では指定辞—主要部一致が形態的に具現する主要部 (I(nfl)、C(omp)、D(eterminer)) の補部に限られるからである。詳しくは Lobeck (1995) を参照してほしい。
- ⁵ Chomsky (1993) は移動は痕跡ではなくコピーを残すと提案している。しかし、本論では便宜上、移動のコピーを伝統的な表示法に従って t とだけ表示しておくことにする。コピーは PF でコピーイントネーションを与えられ削除されるので本論での議論に影響はない。
- ⁶ ここでの分析によると、(i) から (ii) が派生されることが予測される。
- (i) He's writing, but you can't imagine [_{CP} where [_{IP} he thinks [_{CP} [_{IP} he's writing t]]]]].
- (ii) *He's writing, but you can't imagine where he thinks.
- (i) から (ii) が派生されないのは、(i) の斜体の IP は指定辞—主要部一致が形態的に具現する主要部の補部でないため、平行性解釈に従うと標示できないからである。「平行性解釈に従う」と標示された IP を補部としてとる C 主要部は指定辞—主要部一致をしていない。この問題については注 4 を参照のこと。
- ⁷ (47) と同様に (43) においても t₁ は α 生起指標を持ってもよいように見えるかもしれない。しかし、(47) と違って (43) では t₁ が「平行性解釈に従う」と標示されている。「平行性解釈に従う」という標示をなされた要素は、指示に関してもそ

の先行詞に依存することから α 生起指標は持つことができず、必ず β 生起指標を持つことになる。

- ⁸ 島を超えることなく連続循環的に wh 句が移動した (i) は (ii) の解釈を持つことができる。

(i) I think Agnes said that Bill would speak, but I don't remember what about.

(ii) I think Agnes said that Bill would speak, but I don't remember [_{CP} what about [_{IP} Agnes said [_{CP} t that [_{IP} Bill would speak t]]]].

(Chung, Ladusaw, and McCloskey 1994 : 44)

参考文献

- Chomsky, N. (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge.
- Chomsky, N. and H. Lasnik (1993) "Principle and Parameters Theory," In J. Jacobs *et al.* eds., *Syntax : An International Handbook of Contemporary Research*, Walter de Gruyter, Berlin.
- Chung, S., W. Ladusaw, and J. McCloskey (1994) "Sluicing and Logical Form," ms. To appear in *Natural Language Semantics* 3.
- Fiengo, R. and R. May (1994) *Indices and Identity*, MIT Press, Cambridge.
- Heim, I. (1982) *The Semantics of Definite and Indefinite Noun Phrases*, Doctoral dissertation, University of Massachusetts.
- Lasnik, H. (1994) "Verbal Morphology: Syntactic Structures Meets the Minimalist Program," ms. University of Connecticut.
- Levin, L. (1982) "Sluicing : a Lexical Interpretation Procedure," in J. Bresnan ed. *The Mental Representation of Grammatical Relations*, MIT Press, Cambridge.
- Lobeck, A. (1995) *Ellipsis*, Oxford University Press, Oxford.
- Pesetsky, D. (1987) "Wh-in-situ : Movement and Unselective Binding," in E. Reuland and A. ter Meulen eds., *The Representation of (In)definiteness*, MIT Press, Cambridge.
- Rosen, C. (1976) "Guess what about," *NELS* 6, 205-211.
- Ross, J. R. (1969) "Guess who ?" *CLS* 5, 252-286.

Synopsis

On the Derivation of Sluicing : LF Copy vs. PF Deletion

By Atsushi Takekoshi

In this paper I will examine the derivation and the licensing of ellipsis, especially the phenomenon that has been called *sluicing*. The examples are given in (1).

- (1) a. Somebody just left - guess who ____.
b. They claimed they had settled on something, but it wasn't clear what ____.

There are two approaches to ellipsis : *LF copy analysis and PF deletion analysis*. Under the LF copy analysis, elliptical expressions are inserted into syntactic structure as empty categories. They are reconstructed at LF by copying the content of the antecedent. On the other hand, under the PF Deletion analysis, elliptical expressions are inserted into syntactic structure in the same way as non-elliptical expressions. Elliptical expressions are elided at PF under certain conditions. The PF deletion analysis was adopted in earlier versions of generative grammar. In 80's the LF copy analysis became influential. But recently Chomsky (1995) adopted the PF deletion analysis and many linguists claims that the PF deletion analysis is superior to the LF copy analysis. But most of the proponents of the PF deletion analysis deal with VP ellipsis, but not sluicing. So, in this paper I claim that sluicing also supports the PF deletion analysis.

Many proponents of the LF copy analysis pointed out problems with the PF deletion analysis of sluicing. But as I will show in this paper the problems can be solved under the theory of ellipsis in Chomsky (1995). This means that Chomsky's theory is on the right track as far as ellipsis is concerned. But there are some unclear points in Chomsky's assumption about the derivation of ellipsis. Therefore, I will elaborate the PF deletion approach, clarifying the

unclear points.